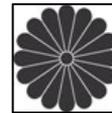


受賞者：本寺地区地域づくり推進協議会（岩手県一関市）

天皇杯  
受賞年：平成30年



## むらづくりの経緯

- ・本寺地区は、かつて「骨寺村」と呼ばれた中尊寺の荘園で、中尊寺に残る陸奥国骨寺村絵図が国指定の重要文化財に指定されたことから、歴史的な景観を残すことと生活を維持していくための農業の生産性・効率性を高めるほ場整備の両立が、住民にとって課題。
- ・その後、荘園的な風景や暮らしを残しながら、「豊かな農村景観を保全する景観保全型ほ場整備」を実施。
- ・平泉の文化遺産の構成資産に骨寺村荘園遺跡が追加されたことから、平成15年度に全戸加入による「本寺地区地域づくり推進協議会」を設立し、荘園遺跡と共存する地域づくりに取り組む。

## 受賞当時

### 生産活動の特色

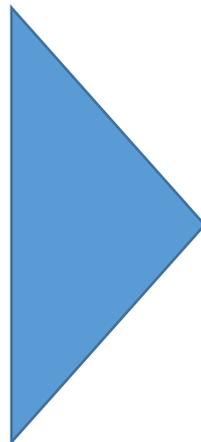
- 骨寺村荘園遺跡内の水稲は、骨寺村荘園米研究会が減農薬と自然乾燥にこだわった「骨寺村荘園米」を生産し、荘園オーナーへの返礼や産直コーナーで販売する等、ブランド化に取り組む。
- 平成19年度からは、高い糖度が特徴の「南部一郎かぼちゃ」の栽培に取り組み、生食用以外に粉やペーストに加工し、粉を練りこんだうどんやすいとんは、レストランのメニューとして、ペーストしたものは機内食や首都圏のデパートの通販で扱われている。
- 歴史的景観に配慮した土水路を保全するため、岩手県建設業協会、一関市水道工事業協同組合と骨寺村荘園遺跡水路等の整備に関する協定を平成19年度に締結し、地域住民と一緒に泥上げ等の維持・管理作業を実施。

### 地域づくりの特色

- 平成20年度からは、骨寺村荘園米オーナーや大学生に加え、地元小中学生も一緒になって田植え、稲刈り体験交流会に地区住民も含めて各200名ほど参加している。また、陸奥の国骨寺村の公事奉納を現代によみがえらせた骨寺村荘園中尊寺米納めを実施。
- 協議会の女性が主体となって荘園交流館を拠点に、郷土料理レストランの運営を行うほか、伝統芸能の伝承や都市農村交流に取り組んでおり、レストラン、産直コーナーの年間販売額が約1800万円で農家所得向上に寄与。
- 地元イベントの参加や地域の様子、協議会の活動の紹介を行っている会報「骨寺通信」は、年複数回発行で91号に達しており、荘園米オーナーにも配布し、地域情報の共有に活用している。

～受賞直後の効果～

- ・マスコミで取り上げられ、来訪者が増加
- ・農村景観の保全活動に賛同する多くのサポーターを獲得



## 現在

### 評価ポイントの取組状況

- 「骨寺村荘園米」や「南部一郎かぼちゃ」加工品の販路促進のため、イベントでの提供や商談会などでPR活動を行っている。また、6次産業化や地産地消の推進による地域振興にも役立っている。
- 地形に沿って曲がりくねった土水路の保全活動は、相当な労力を要するため、地域住民とともに市や民間団体が協力して歴史的景観を守っている。
- 田植え、稲刈り体験交流会の実施や農村体験としての旅行の受入れにより、都市と農村の交流を進めている。
- イベントで鶏舞を披露するなど伝統行事の復活にも取り組むことで、地域住民の意識向上にもつながっている。



本寺地区荘園遺跡内水田



南部一郎かぼちゃ

## 今後の展開

- 伝統的な農村景観を残すため、営農の継続を重視し、地域振興につながる取組の継続に努める。
- 地域おこし協力隊の支援により地域活性化を図る。

受賞者：特定非営利活動法人ゆうきハートネット（岐阜県加茂郡白川町）

内閣総理大臣賞  
受賞年：平成30年



### むらづくりの経緯

○白川町は総面積の88%を山林が占める農業と林業が主要産業の町で、高級茶「白川茶」や優良材「東濃桧」が特産品の山間農業地域。  
 ○平成10年、10名の農業者が有機農業の生産技術の研鑽を目的とした任意団体「ゆうきハートネット」を設立し、稲作を主体に有機農業の取組開始。有機農業に関心が高まる中、平成21年にゆうきハートネットと白川町が中心となり「白川町有機の里づくり協議会」を設立し、町を挙げて有機農業の推進体制を構築。  
 ○平成23年に法人化し、有機農業研修施設「くわ山結びの家」を設置し新規就農者の育成や移住者の受け入れを通じて地域振興を図る。平成30年に白川町が整備した農業研修交流施設「黒川Maruke」を町と連携して運営し、研修生の受け入れ、地域の情報交流の場として活用。

### 受賞当時

#### 生産活動の特色

○消費者との直接契約販売、名古屋市のオーガニックファーマーズ朝市村での販売、有機農産物を扱うスーパーと提携した販売などを通じて、会員の経営安定につなげている。  
 ○講演会、研修会等により、会員の技術向上や新規就農者の技術取得に寄与している。  
 ○有機農業を始めたい就農希望者を積極的に受け入れている。  
 ○就農希望者の移住者へのサポート(就農・移住)により、すべての移住者が地域に溶け込み、農業に従事している。

#### 地域づくりの特色

○会員である郷蔵米生産組合、大豆畑トラスト、はさ掛けトラストと連携し、創意工夫した都市住民との交流の取組が行われている。  
 ○田植えや稲刈りなどの消費者との交流イベント、有機農産物を取り扱うスーパーと連携した子どもたちの農業体験など、都市住民との交流活動に積極的に取り組んでいる。  
 ○若手移住者は全ての世帯が消防団に加入し、地域の伝統文化である地歌舞伎に参加するなど、地域活動にも積極的に貢献している。また、これまで子どもが無かった集落に移住者の子どもが生まれ、集落全体で子どもを見守り育てる機運が高まり、集落の人たちが交流することで地域の活性化につながっている。



オーガニックファーマーズ朝市村



有機農業研修施設「くわ山結びの家」

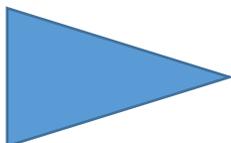


農業研修交流施設「黒川Maruke」

～受賞直後の効果～  
・全国から有機農業に取り組みたい個人、団体の視察が増加



ゆうきハートネット会員の皆様



種もみの温湯消毒



手押し除草機(田車)で除草

### 現在

#### 評価ポイントの取組状況

○販売先は引き続き確保している。その中で、有機農産物を扱うスーパーと連携した販売では店舗数が増えた(4店舗→5店舗)こともあり売上額が増加(110万円(H30)→800万円(R5))。  
 ○移住者が地域の中心となって活性化に貢献。また、移住者との垣根がなくなりつつあり、地域の担い手として位置づけられている。  
 ○「小農フェス」(R5. 9)に開催し、都市住民と交流(110人訪問)。  
 ○名古屋大学の学生が白川町で行った卒論研究が契機となり、「白川町まるっとカフェ」を黒川Marukeで月2回開催し住民の憩いの場となっている。  
 ○白川町グリーンツーリズム協議会(R2設立)の体験・交流部門として農作業体験等の都市住民との交流活動に取り組んでいる。



安全で品質の高い有機農産物



堆肥づくりワークショップ



はさ掛けを体験する都市住民

### 今後の展開

○農地や新規就農者の確保に向けた地域の営農組織(慣行栽培)との連携に向けた勉強会の開催  
 ○地域の未利用資源の有効活用(たい肥化)  
 ○ブランド力の向上に向けたロゴ作成  
 ○学校給食への食材の供給拡大(現在600食)

なかつがわ  
受賞者：中津川区公民館

さつま  
(鹿児島県薩摩郡さつま町)

日本農林漁業振興会会長賞  
受賞年：平成30年

日本農林  
漁業振興  
会会長賞

### むらづくりの経緯

- ・中津川区は、鹿児島県の北西部、さつま町東部の5集落からなる水田地帯であり、かつてこの地域を治めていた島津金吾歳久公を祀る大石神社に奉納する「金吾様踊り」を継承してきた地域。
- ・5集落の公民会長と5つの専門部会で構成されており、住民総参加で策定した「地域づくり活性化計画」を基に、専門部会と青年・女性組織、農業者団体等とが連携して実践活動を行っている。

### 受賞当時

#### 生産活動の特色

- 昭和45年に設立された「中津川採種生産組合」は、半世紀にわたり県内の普通期水稻の種籾全てを生産・供給。全国的に1産地1品種に絞る産地が多い中、8品種もの種籾を生産。
- 近隣地域の肉用牛農家女性とともに発足した「牛々さつまおじよの会」では、畜産技術の学習、新規就農者や若手肉用牛農家との合同研修会の開催、相互に経営や家庭の悩みを語り合う交流等を展開。
- 平成23年から月1回、野菜や加工品を直売する「なかっこ朝市」では、平日は無人販売所として開設され、高齢農家等の収入確保や生きがいづくりとともに、地域の高齢者が集うサロンの役割として寄与。



牛々さつまおじよの会



なかっこ朝市

#### 地域づくりの特色

- 48ある「大念仏踊り」のうち、「地割舞」と「稚児舞」の復活を住民一丸となって実現。地元の農産物や手作り加工品等の販売を行うなど、踊りを見に来る地域外の観客を意識した取組を実施。
- 地区内の遊休農地でさつまいもを栽培し、独自の焼酎「金吾さあ」を製造・販売。植付、収穫は保育園や子ども会と一緒にいき、売上の一部を「金吾様踊り」の協力金として自主財源として充当。
- 青壮年で結成した「吾友会」は、世代間交流事業の企画運営、町が主催する婚活イベントへの参画等に取り組み、UターンやIターン移住者の増加に寄与。



55年振り復活「地割舞」



住民総出で焼酎用いもを植付

### 現在

#### 評価ポイントの取組状況

- 「中津川採種生産組合」は、組合員の後継者5戸、新規参入者2戸が受け継ぎ、安定した種籾も生産に取り組んでいる。
- 「牛々さつまおじよの会」は、価格低迷下に対応した畜産経営に重点を置いて学習を続けている。
- コロナ禍でも月1回の「なかっこ朝市」や平日の無人販売所を開設し、高齢農家等の収入確保や消費者から頼られる取り組みとして期待をされている。さらに、夏の「さなぼり会」や秋の「収穫感謝祭」を開催し、地区内外の交流促進を図っている。
- 48ある「大念仏踊り」のうち、「地割舞」と「稚児舞」の復活に続き、64年ぶりに「棒打ち舞」を平成31年に復活し、記録映像として、「日本の祭り」として同年に全国放映された。令和5年には、地区外の方から「金山踊」の参加を得るなど、地区内外の祭りとして賑わっている。
- さつまいも栽培等は継続しており、さらに金吾様グッズの販売も新しい自主財源の確保にも取り組んでいる。
- 地区内食材を活用した地域食堂として「なかっこカフェ」を令和3年から毎月第2土曜に開催し、小学生等と高齢者の食を通じた交流の場となっている。



64年振り復活「棒打ち舞」



令和3年11月「なかっこカフェ」開設

#### 今後の展開

- 空き家を活用した、人口増加への取り組み。中津川地区に新たに再編された「薩摩小学校」と連携した地域活性化の取り組み。

～受賞直後の効果～

・H31年「日本の祭り」全国放映  
 ・64年ぶり「棒打ち舞」復活・視察の受け入れ、講演依頼の増加  
 ・U・ターン者の出現  
 ・R2年に金吾様踊りは、コロナの影響で中止したが、その後は、地区内から開催への機運の高まりもあり、防衛村策を行い祭りを実施した。